190713

アウローラ管弦楽団

サマーコンサート2019

2019.7.13

杉並公会堂（大ホール）

ごあいさつ

Message

本日はお忙しい中、アウローラ管弦楽団の演奏会にお越し頂き、誠に有り難うございます。当団は今年５月に創立１０周年記念演奏会を終え、新たなスタートを切ることになりました。本日は次回定期演奏会に先駆けた特別演奏会となります。

日頃から当団をご支援頂いているお客様の中には、「アウローラでブラームス？」と戸惑われた方もいらっしゃるかと思います。ロシア音楽専門オーケストラを標榜する当団は、活動のメインとなる定期演奏会ではロシア音楽を取り上げるという基本方針を守りつつ、定期演奏会以外の企画演奏会では必ずしもロシア音楽だけにこだわらず、 これまでにもマーラーの「大地の歌」やモーツァルトの「レクイエム」、サン＝サーンスの交響曲第３番「オルガン付き」、プーランク「スターバト・マーテル」、ブルックナー「テ・デウム」等を特別演奏会という位置付けにて開催して参りました。ここ一年ほど、当団の選曲がプロコフィエフやハチャトゥリアン、ショスタコーヴィチなど大編成の作品中心となっていたこともあり、記念演奏会が終わったこのタイミングで今一度、オーケストラとしての自分達の基礎を固めるべく、結成当時の１０型２管編成に姿を戻し、正統派ドイツ交響曲と、私たちに最も馴染みの深いラフマニノフの２曲を取り上げる演奏会を企画した次第です。

普段ロシア音楽を演奏しているオーケストラがブラームスの交響曲を演奏してみたらどうなるのか、またラフマニノフの最難関とされるピアノ協奏曲第３番にどのように挑むのか。どうぞお楽しみ頂ければ幸いです。

曲目紹介

Program

S.V.ラフマニノフ　　Сергей Васильевич Рахманинов

ピアノ協奏曲第３番ニ短調　Концерт для фортепиано с оркестром №.3

第１楽章　Allegro ma non tanto（ре-минор）
第２楽章　Intermezzo: Adagio（фа-диез минор - ре-бемоль мажор）
第３楽章　Finale: Alla breve（ре-минор - ре-мажор）

～　休憩（２０分）　～

J.ブラームス　　Johannes Brahms

交響曲第２番ニ長調　　Sinfonie Nr. 2 D-Dur

第１楽章　Allegro non troppo
第２楽章　Adagio non troppo - L'istesso tempo,ma grazioso
第３楽章　Allegretto grazioso (Quasi andantino) - Presto ma non assai - Tempo I
第４楽章　Allegro con spirito

指揮者紹介

Conductor

高橋 勇太　(YUTA Takahashi)

１９７８年東京生まれ。指揮を村方千之氏に師事。東京学芸大学音楽科を卒業。１９９７年より３年にわたり、ドイツ・バイロイト音楽祭で、その後ドイツ国内のライン・ドイツ・オペラ、ドレスデン国立歌劇場、デュイスブルク交響楽団、オーストリアのウィーン・フォルクス・オーパーで研鑽を積む。

２００１年スイスのマスタープレーヤーズ国際指揮者コンクールでディプロマ賞を受賞。２００２年ルーマニア国立歌劇場におけるオペラ「夕鶴」の現地初演の副指揮者を務める。２００５年、東京を中心にオペラ・オペレッタ・ミュージカルの各公演を立て続けに指揮してデビュー。東京大学フィロムジカ管弦楽団の常任指揮者、シュエット交響楽団の常任指揮者・音楽監督を歴任。日本オペラ振興会の指揮スタッフを始め、フリーの指揮者として各地のオーケストラ・オペラ等を指揮する。

２０１０年以降、ヨーロッパやアジア各地のオーケストラ・オペラ座に招かれて公演を指揮する。２０１０年のブルガリア・シューメン市立フィルハーモニーの「オール・ドイツ・プログラム」、ベトナム・ハノイ国立オペラ座での「第九」、２０１１年のルーマニア国立コンスタンツァ歌劇場のオペラ「ルチア」各公演は大成功を収め、特にルーマニア国立歌劇場ではリハーサルと公演に於けるソリスト・楽団員との厚い信頼関係が好評で、即座に同年秋の国際フェスティバル「カルミナ・ブラーナ」公演へ招聘を受ける。その後、オペラ・オーケストラ公演共に客演を重ねる。

現在は東京シティオペラ協会指揮者、現代音楽集団アンサンブル・ロカ常任指揮者。また２００６年より在京のプロオーケストラとしては異例の若さで東京サロンシンフォニーオーケストラの常任指揮者に就任。以降、１０年以上にわたり、北海道から九州・沖縄まで全国で３００回以上の公演を行っている。２０１５年、黒海指揮者コンクールで準優勝。東京・練馬区在住。

ソリスト紹介

Soloist

三好 朝香　(ASAKA Miyoshi)

ラフマニノフ国際コンクール(ロシア)にて第１位及び審査員特別賞受賞。PTNAピアノコンペティション特級銅賞。ショパン国際ピアノコンクール in ASIA プロフェッショナル部門２位、高校生部門金賞、同コンクールコンチェルトC部門全国銅賞。北本音楽コンクール大学生部門３位、全日本学生音楽コンクール大阪本選高校生の部入賞、山陽学生コンクール高校生部門１位など数多く受賞。学内にて成績優秀者としてモーニングコンサートに選出され、藝大フィルハーモニア管弦楽団とラフマニノフピアノ協奏曲１番を共演。また、室内楽木曜コンサート出演者にも選出される。その他、東京交響楽団、大阪チェンバーオーケストラ、岡山フィルハーモニック管弦楽団と共演。日本財団ランチタイムコンサート、大阪すばるイブニングコンサート、岡山ピアノフェスティバル、『I am a SOLOIST』等に出演。小山実稚恵協奏曲マスタークラスを受講。２０１７年岡山にてリサイタルを開催。

これまでに、川島基、C. ソアレス、松本和将、鷲見加寿子の各氏に師事。学内にて角野裕氏に、室内楽を藤本隆文、津田裕也、青柳晋、植村太郎の各氏に師事。現在東京藝術大学大学院修士課程２年に在学中。

オーケストラ紹介

Orchestra

アウローラ管弦楽団　Оркестр ≪Аврора≫

ロシア音楽を中心に演奏するアマチュア・オーケストラとして２００９年に結成。「アウローラ」とはロシア語で“暁の女神”を意味し、転じて“夜明け”を表す。これまでの１０年間に２１回の定期演奏会、９回の室内オーケストラ演奏会、４回の特別演奏会を開催。演奏してきた曲数は９８曲に及ぶ。

団員数は約７０名。男女比はほぼ１：１。結成以来団長を置かず、係などの運営組織体系も存在しない自主運営の団体であるものの、当団の創立者であるコンサート・ミストレスのリーダーシップと精神的な支えの元、独特の体制が形成され、これまで１０年間に渡ってオーケストラ活動を維持している。

ロシア音楽ばかり演奏している当団ですが、多くの団員は別のオーケストラや室内楽等で他国の音楽も等しく愛でており、決して「ロシア音楽しか演奏しない排他的な奏者の集まり」という訳ではありません。そんな団員内で「もしアウローラで正統派ドイツものを演奏したらどうなるんだろう？」という話が出たところから本日の企画が出発しました。シーズン初合奏ではロシア音楽的なゴリゴリな演奏をしてしまい、高橋先生を呆れさせてしまったりもしましたが、私達なりの苦労を重ねて本日の演奏会に辿り着きました。その成果をお聴きください。

出演者

Member

♪首席奏者　＊賛助出演　†団友

1st Violin
†大越　智
大沼　泰秀
＊河合　佑華
東海林真弓
杉山　慧美
鈴木　真之
中務　愛子♪
福田　壮一
前野　敬一
横手麻衣子♪

2nd Violin
大藤　千佳
†熊山　有喜
大堂　悠洋
高山日実子
戸倉　翔一
古田　彩乃
松本　美穂
水野　光♪

Viola
石原　里奈
梶谷　美香
佐野　裕貴
篠塚　晋吾
清水　幸代
山田　直敬♪
與儀喜代太

Violoncello
髙田　音葉
戸ヶ崎祐太♪
福田　勝美
冨士元紗英
藤元　義久
水口　尚子

Contrabass
戒田　英輝♪
坂田陽太郎
＊杉木　華
戸田　利忠
永峯　豊

Flute
大槻　郷子♪
齋藤　裕介
嵯峨根節笑

Oboe
石橋　慶太♪
江尻　佳代

Clarinet
菅　清子
松村　恭子♪

Bassoon
大島　彩子
谷内田真也♪

Horn
†久保　早織
嵯峨根昌樹
†竹本　龍平♪
西野　直

Trumpet
伊藤　大河♪
稲葉　麻衣

Trombone
伊木　史紀♪
†鈴木　香織

Bass Trombone
高橋　重典

Tuba
†東海林拓人

Percussion
†浅井　史織
常石　堅司♪
†本田　恭子

曲目解説

Program note

演奏中は客席の照明が暗くなる為、パンフレットの文字が読みづらくなります。パンフレットの曲目解説などは演奏前に目を通して頂き、演奏中はどうかステージ上の私たちの姿を見ながら、演奏に耳を傾けて頂ければと思います。

ピアノ協奏曲第３番ニ短調　S. V. ラフマニノフ

荒涼とした高山の岩肌に、誰の為でもなく、ただ己自身の為に凛と咲く、一輪の孤高の花。

コンポーザー・ピアニスト（自作のピアノ独奏も行う作曲家、シンガーソングライターのピアニスト版）として、ロシア音楽史上最高の演奏技術を誇ったラフマニノフ。その彼が全創作力を注いで1909年に書き上げたピアノ協奏曲第3番は、世の中に数多あるピアノ協奏曲の中でも孤高の傑作として輝きを放っています。

ピアノ作曲家としてのラフマニノフ

5曲の本格的な交響曲を残した交響作曲家、あるいは演劇大国ロシアの伝統を汲む優れた室内オペラを世に送り出したオペラ作曲家 ― ラフマニノフには作曲家としていくつもの優れた顔がありますが、彼の名を今日最も有名にしているのは、やはり断然ピアノ作品の作曲家としての顔でしょう。

そんなピアノ作曲家ラフマニノフの中でも最も世に知られている代表作が、前奏曲「鐘」と、ピアノ協奏曲第2番であることにも異論はないでしょう。特に後者は演奏会で取り上げられる頻度や発売されているCDの種類、漫画やドラマや映画といった娯楽分野への進出度など、あらゆる点に於いてクラシック音楽屈指の人気を誇る大ヒット作品です。

そんな人気作品の陰に隠れる形となってしまったピアノ協奏曲第3番は、後に述べるようにその圧倒的な難易度の高さ、あるいは大衆性から距離を置いた孤高の立ち位置もあって、演奏回数は前作の第2番には及びません。しかし、第2番をさらにスケールアップしたドラマティックなストーリー性や、ピアニストの持つ全精力を極限まで引き出させる超絶技巧の連続、それでいて全曲を貫く美しく豊かなロシアン・ロマンに満ちた旋律など、当時創作活動の絶頂期にあったラフマニノフの魅力が余すところなく凝縮された傑作であると言えるでしょう。

恐るべき難度を誇る協奏曲

この協奏曲を語る際にまず誰もが口を揃えるのが、その圧倒的なまでの難度、即ちピアニストに課せられる技術的かつ音楽的なハードルの高さです。この作品の魔力に憑りつかれ、全てを捨てて挑んだ結果、コンクールでの成功と引き換えに精神を崩壊させてしまうピアニストを描いた映画「シャイン」に象徴されるように、ピアノ協奏曲史上最も演奏が困難である作品のひとつとされています。

その難易度の高さ故に、古今東西、数多の名ピアニストがその登頂に挑戦してきました。例えば東西冷戦の真っ只中にソヴィエトが国家の威信をかけて開催した第一回チャイコフスキー国際コンクールで、並み居るロシア人ピアニスト達を押しのけてアメリカ人のヴァン・クライバーンが世界史に残る優勝を果たした時の演奏曲がこのピアノ協奏曲第3番であったように、20世紀から現代に続くピアノ演奏史は、この難曲の登頂に挑む歴史でもありました。

このピアノ協奏曲第3番に限らず、ラフマニノフのピアノ作品はどの曲も演奏が至難なことで知られていますが、なぜ彼のピアノ作品は難しいのか。その理由は大きく2つあります。

まず、よく知られているようにラフマニノフは身長2メートル近くの巨躯の持ち主であり、手を大きく広げた時の親指から小指までの幅が27cmという巨大な手を駆使して、鍵盤の12度の音程（ドからオクターブ上のソまで）を鷲掴みにする演奏が可能でした。コンポーザー・ピアニストである彼は当然のことながら自作自演を前提とする作品を作曲した為、自ずとその作品は彼の身体的特徴をフル活用する想定の楽譜となり、結果的にラフマニノフ自身は易々と弾けるものの他の常人ピアニストには肉体的な負担を強いる挑戦的な作品となってしまったのです。

そしてもうひとつの理由は、ロシア音楽としての特質です。ロシア音楽の特徴のひとつに「息の長い旋律」があることはよく知られていますが、特にラフマニノフは極めて息の長い抒情的な旋律を大切にする、クラシック音楽屈指のメロディー・メーカーでもありました。しかし、彼が作曲のメインストリームとしたピアノ作品は、ピアノの音が発音後に構造上必ず減衰してしまう為、そのままでは彼が得意とする息の長い旋律を生み出すことができないという問題がありました。

そこでラフマニノフが辿り着いた解決法は、音が減衰する隙を与えない程の圧倒的な音の数を楽譜に埋め込む「物量攻撃」でした。他の作曲家が10個で済ませようとする楽譜に、ラフマニノフはその2倍、3倍、いやそれ以上の音符を、演奏至難になることを覚悟の上で埋め尽くしていったのです。ピアノ協奏曲第3番のピアノの音符数は実に3万254個という膨大なものとなっています。(ちなみに演奏時間が同じくらいのショパンのピアノ協奏曲第1番は1万7099個です。)

このような理由により、ラフマニノフのピアノ作品はいずれも高い難易度を誇るものとなりました。そんな難曲揃いの彼の作品の中でも、ピアノ協奏曲第3番は肉体的な負担、音符の数の多さのいずれもが突出しており、ラフマニノフのピアノ作品の粋を極めた集大成といって過言ではないでしょう。

ピアノ協奏曲の最高峰に君臨する「孤高の傑作」

演奏時間が20～30分程度であることが一般的な協奏曲というジャンルにあって、ラフマニノフのピアノ協奏曲第3番は演奏時間40分を越す長大な作品です。前作の第2番は伝統的な「ピアノ協奏曲」の構成を踏襲しつつ協奏曲というジャンルの最高位に登り詰めましたが、この第3番は協奏曲の伝統である3楽章構成は保持しつつも、そこからさらなる進化を模索し、その探求の結果(*1)、音楽的内容の濃密さも、演奏時間も、単なる協奏曲というジャンルを超えた「ピアノ独奏付き交響曲」という領域にまで昇華しています。協奏曲が交響曲の様式にまで到達している曲としては、このラフマニノフのピアノ協奏曲第3番と、ショスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲第1番の他には、そうはありません。

(*1)ラフマニノフは自らの作品に於いて、協奏曲と交響曲の融合を模索していた節があり、晩年になって「協奏曲の持つ伝統的な3楽章構成で、2楽章にはアダージョとスケルツォという中間楽章の要素を三部形式で埋め込む」という交響曲のスタイルを確定させます。その完成形が交響曲第3番や人生最後の作品となる交響的舞曲ですが、その完成形に至る過程で同様の形式をピアノ協奏曲の形で試作したのがピアノ協奏曲第3番でした。その意味ではこの協奏曲は交響曲第3番に向かうプロトタイプ(試作品)であったとも言えそうです。

登山家が標高8000mを超す世界最高峰の14座の山々に対して畏敬の念を覚えるのと同じように、その題名だけでピアニストを畏怖させてしまうほどの難曲は、この第3番の他には多くは存在しません。全曲を貫くラフマニノフならではの雄大な抒情性と、シンフォニックな構成美と、そして息をつかせぬピアニストの超絶技巧が、三位一体となって高い次元で練り上げられた第3番。その一方で、この作品の放つ求道的なストイックさは人を近づけがたく、その三位一体にさらに親しみやすさという第4軸を加えた四位一体の傑作である前作第2番にはポピュラリティで及びません。しかしそれ故に、この孤高の作品は誰にも媚びず、誰にもおもねらず、自分自身の力でクラシック音楽という芸術山脈の頂きに超然と存在しています。まるで、荒涼とした高山の岩肌に、誰の為でもなく、ただ己自身の為に凛と咲く、一輪の孤高の花のように。

§

ピアノ協奏曲第3番は一般的な協奏曲の形式を採用し、全3楽章から構成されています。

第1楽章

巨大なカデンツァを持つ長大な楽章。その冒頭は大作に似つかわしくない、意表を突くような鬱屈した雰囲気で始まります。ピアノソロがアンニュイに奏で始める鄙びた旋律はシンプルなユニゾンで、超絶技巧で知られる協奏曲であることを一瞬忘れさせるほどですが、ほどなくするとすぐにピアノは複雑なパッセージを見せ始め、替わってピアノの旋律を受け継いだオーケストラは情熱的な盛り上がりを見せます。盛り上がりが落ち着きを見せると、替わってこれも慈愛に満ちた美しい旋律が奏でられ、ラフマニノフらしい抒情的な世界が充分に繰り広げられます。

やがて音楽は次第に焦燥感に駆られるように速度を速めてゆき、ピアノの激しい乱打に導かれて激情的に高揚します。押し潰されそうな禍々しい響きのまま音楽は頂点に達しますが、そこから次第に勢いが衰えながら、巨大な影が足を引きずるように重苦しく立ち去ると、訪れる静寂。そして、いよいよピアノの長大なカデンツァに突入します。

よく知られるように、ラフマニノフはこのピアノ協奏曲のカデンツァに「オリジナル」または「小カデンツァ」と呼ばれる短く穏やかなものと、「オッシア」または「大カデンツァ」と呼ばれる長く重厚で派手なものの2つのバージョンを用意しました。どちらを選択するかはソリストに委ねられますが、両者に音楽的・技術的な優劣はなく、いずれのカデンツァにもラフマニノフのピアノ作曲家としての真髄が込められています。カデンツァが終わると、落ち着いた雰囲気で冒頭のアンニュイな旋律が回帰しますが、再びテンポを速めて焦燥感を残しつつ、この長大な楽章は静かに終わります。

第2楽章

静謐な雰囲気に包まれた、神秘的なアダージョ。憂鬱でありながら美しい旋律に始まり、オーケストラによる幻想的な情景がとめどなく流れ続けます。ソロピアノが雪崩のように乱入して一瞬風景が乱れますが、すぐに元の世界を取り戻し、オーケストラとピアノは共に幻想世界を彷徨い、1楽章冒頭の旋律も懐かしげに顔をのぞかせながら、果てるともない夢うつつの色彩にまどろみます。

やがて、それまでの夢想を振り払うかのような、せわしないワルツが始まります。(ラフマニノフが後年に交響曲にまで発展させた、アダージョ楽章にスケルツォ楽章を融合させる試みです。)ピアノの華麗な技巧を縫うようにしてオーケストラが様々な旋律や和声の華々を咲かせながら盛り上がり、その終結部ではロシアの鐘の音を模倣するようなピアノの乱打が執拗に繰り返され、この楽章最大のクライマックスを築き上げます。

やがて音楽は再び瞑想に沈み、冒頭の旋律が今一度顔を覗かせて盛り上がりを見せた後、突然静寂を破るようにピアノが決然とした目覚めの動機を鍵盤に踊らせます。ピアノとオーケストラは激しく交錯しながら急激に加速し、そのまま終楽章に怒濤のように雪崩れ込みます。

第3楽章

これまでの鬱蒼とした憂いや幻想的なまどろみの風景と完全に決別した、情熱の炎が迸る終楽章。ピアノが劇的な旋律を力強く奏でると、オーケストラがその旋律を引き継いで繰り返し、次にはまたもピアノによって抒情的な旋律が伸びやかに歌われ、この男性的な旋律と女性的な旋律の対比で曲の前半部が形作られます。

ひとしきりの盛り上がりの後に一旦音楽は落ち着き、これまでの楽章に見られたメランコリックな世界が再度姿を現します。第1楽章冒頭の旋律が回想されるなど、ロマンティックに美化された過去を振り返る夢想の時間を経ますが、それは束の間の安らぎです。再び決然とした音楽に戻ると、熱狂的な情熱の炎はさらに輝きを増しながら燃え盛ります。ダイナミックな躍動感溢れる音楽の合間に、これまでの情景の数々が走馬灯のように頭の中を駆け巡りますが、それら過去の想い出を振り払いながら、音楽は興奮の度合いを増してゆき、長大なドラマの完結に向かって一気呵成に突き進みます。

突如静まり、意を決したかのように始まる最終局面。その開始を告げるのは、ピアノの低音と弦楽器のコル・レーニョ奏法による、地の底から沸き上がるようなリズム。そのビートに急き立てられるように息をもつかせぬ猛烈な追い込みがかかり、ピアノとオーケストラが渾然一体となって融合した劇的な盛り上がりの頂点、一瞬の静寂の後にピアノが雪崩を打つような怒濤のカデンツァで地の底まで駆け降り、クライマックスに突入します。

40分にも及ぶ協奏曲の果て。ここに至ってラフマニノフは、最後の最後までずっと孤高の仮面を被って押し留めてきた、心に溜め込んできた「感動する気持ち」を、ついにこのエンディングの場面で全て解き放ちます。前半の優雅な主題が美しく雄大に昇華した、壮麗なクライマックス。全てを感動の渦に巻き込む音楽は、息を飲むような圧巻の頂点を築き上げます。この感動に出会う為に、私たちは長い旅をしてきたのかもしれません。

そしてコーダはテンポを上げて一気に盛り上がり、華やかな祝祭の響きのままに、ロマンティックな旋律で綴られた壮大な音楽の幕をおろします。

§

ピアノ協奏曲第3番は、ラフマニノフが作曲家としての絶頂期に生み出された充実の傑作です。またピアノ協奏曲第3番の発表以降、ラフマニノフはそのロマンティックな作風を次第に変化させ、内向的で近代的な響きに向かうようになります。その意味ではこの作品は「ロマンティック・ラフマニノフ」の完成形であり、ターニング・ポイントでもあります。

音楽史上、ロシアン・ロマンを漲らせた作品を書いた最後の作曲家ラフマニノフ、その後の人生は多くの方が知る通りです。ロシア革命と社会主義国家ソヴィエトの誕生。愛する祖国から逃れ、新天地アメリカでの後半生。時代の激流の中で彼の創作活動は著しく縮小され、亡命後の作品数は少なく、作風も様変わりします。ピアノ協奏曲第3番の続編となる第4番には、第2番や第3番と同じ景色がもはやありません。もしラフマニノフが亡命せずに祖国に残っていたら、あるいは祖国に革命が起きなかったら、ラフマニノフはその後ロシアの地でどのような作品を書いたのでしょうか。

革命で国家の体制が変わり、異国に渡り、異邦人としての疎外感や不安に怯えながらも必死で働き、帰郷叶わぬ祖国を愛しながら年老いて、人生の旅路の終わりを迎える。そんな過酷な物語に、私たちの想像力はどこまで及ぶのでしょうか。ラフマニノフがピアノ協奏曲第3番を書き上げた1909年、彼の人生の物語は、いまだ半ばに過ぎません。

曲目解説

交響曲第２番ニ長調　J. ブラームス

ヨハネス・ブラームス（1833～1897）の残した4つの交響曲はどれも印象的な開始によって聴くものをその音楽世界へと瞬く間にひきいれる。執拗に打ち込まれるティンパニとオーケストラの斉奏によって突如として大河の流れに呑み込まれるような第１番ハ短調、管楽器の雄渾な雄叫が轟き推進力をみなぎらせる第3番ヘ長調、そして弦楽器のしずしずとした歩みに枯淡の境地をにじませる第4番ホ短調。さて、この第2番はどうやって始まるのか…。

夏に避暑地へ赴くのを通例としていたブラームスは、1877年6月、オーストリア南端に位置するヴェルター湖畔の町ペルチャッハを訪れ、そこで第2番となる交響曲に着手し同年10月には完成、12月30日にウィーン・フィルハーモニー管弦楽団によって初演され、大成功をおさめたという。足掛け20年を要した第１番にくらべ、約4ヶ月という驚くべき速筆であった。

作品自体は明るく、軽妙な響きも見られ、開放的なペルチャッハの田舎の風景が作品に影響を及ぼしたとも言われる。（この後もペルチャッハでの夏には、翌78年にはヴァイオリン協奏曲が、78年にはヴァイオリンソナタ第１番といった名作が作曲されることとなる。）

楽器編成としては、ブラームスには珍しくチューバが使われ、3本のトロンボーンと共に四声を成して作品に柔かで印象的な音色と響きの奥行き加えている。

第1楽章

冒頭、チェロとコントラバスによって提示される、レド#レ…という「半音下がってまた戻る」音形は、交響曲全体の「基本モチーフ」として作品のいたる所に現れる。ホルンの伸びやかな問いに木管が牧歌的に応えていき、ゆっくりと美しい自然が目の前にひらけて行く。遠くから一筋、ヴァイオリンが二者の応答に綾を成すかたちで滑りこんでいくと、俄然音楽は立体感を増し、遥かな広がりがたち現れる。と、時を止めるような静かなティンパニのロール。それに続いてトロンボーンとテューバのコラールの朝霧がたちこめる。そして、山並みの向こうから降りてくる日差しのようなヴァイオリンのメロディが滑らかに始まると、ようやく交響曲全体が緩やかに大きく流れだし、豊かな起伏を形作っていく。

ブラームスが交響曲第２番を作曲した南オース

曲目解説

ひとしきり音楽が鎮まるとその色合を短調に転じていき、風にそよぐような心地よいリズムで、上声のチェロに下声のヴィオラがピタリとつけて美しくも憂わしげな二重唱を歌い出す。低音のチェロを上にして、えもいわれぬ音色のブレンドを作り出すあたり、ブラームスの管弦楽法の妙である。

素材が出揃った後は、それらを縦横に駆使して緻密な展開が為されていく。大山鳴動、うねるオーケストラが生み出すダイナミックな音響空間を楽しみたい。

終盤、ピチカートにのって音楽が軽妙に弾み出すが、浮き足立って…とまではいかないのがブラームスらしいところ。太陽は次第にその光量を落とし、日暮れを追うように最後は名残おしさをのこして静かに終わる。

第2楽章

前楽章とはうって変わって、ひんやりと重々しく神秘的な和音で曲は始まる。ただ美しいだけが緩叙楽章ではないのだ。チェロの息の長いメロディは常に陰影を伴い、深い森林に分け入ったような不安感が付きまとう。重苦しい和音の霧が晴れてフルートやクラリネットにメロディが移ると、森の小径をたどるような幾分くつろいだ楽想になるが、それも長続きしない。曲の中ほどでチューバとコントラバスに基本モチーフが現れるが、響きは浮世離れして亡霊のように不気味でさえある。終盤ではティンパニ轟く劇的な盛り上がりがあり、この暖かな交響曲にあっても北ドイツの凛とした冷気が吹き降りるようだ。音楽が穏やかさを取り戻すと、再び暗澹とした森の深みにとらわれていくが、最後の数小節、ほんの束の間の安息がおとずれる。

第3楽章

オーボエによるのどかな旋律がチェロの爪弾くピチカートにコトコト揺られ、前楽章にくらべて、やっぱり我が家が一番とでも言いたげな、心からくつろげる短い楽章。民家の庭先に鶏が二三羽いる様な簡素な響きは風通しも良好。(トランペット、トロンボーン、チューバ、ティンパニは休み。)やがて冒頭のオーボエの旋律から派生した弦楽器のせかせかとした民族舞曲風のエピソードが始まる。木管楽器に主役が移って再度このメロディか現れるときは拍子が変わって、リズム遊びも忘れていない。

トリア、ヴェルター湖畔の町ペルチャッハの風景

曲目解説

第4楽章

「レー、ド#レファ…」と静かに基本モチーフから生まれた音のせせらぎがフィナーレの開幕を告げる、この楽想はこの後も現れる度、わずかに形を変え新しい楽想を呼び込む。ひと呼吸おいて音の奔流が堰を切ったように溢れだし、弦楽器はきびきびと木管は清々しく、躍動感に満ちたアレグロの音楽が展開する。中ほどで弦楽器がゆったり熱っぽく歌いだすメロディは第1楽章の二重唱メロディに呼応するように豊穣である。緩急目まぐるしいリズムの応酬と、流麗な歌ごころが立ち代わり入れ替わり、最後は金管も存分に咆哮し全曲を終わる。

以上、全4楽章。基本モチーフ然り、メロディとは言えないような極めて小さな構成要素から組み上げた、強固で隙の無い絶対音楽の城塞でありつつも、遠景として眺めれば、風光明媚な「ブラームスの田園交響曲」という表題音楽的な親しみやすい第一印象を受けるのは、ブラームスの恐るべき構築力と周到さの賜物であろう。

名峰は今も彼方に、本日の演奏がその旅路の端緒となれば幸いである。

これからの演奏会

Schedule

アンケートにお名前とメールアドレスを記載して頂いた方には、招待チケットをご用意させて頂きます。ぜひ多くの方のご来場をお待ちしております。

第２２回定期演奏会

日時　２０２０年１月１１日（土）１３時３０分開演
場所　すみだトリフォニーホール（大ホール）
指揮　田部井 剛
曲目　カンタータ「アレクサンドル・ネフスキー」（S. S. プロコフィエフ）　※合唱：混声合唱団コール・ミレニアム
　　交響曲第４番ヘ短調（P. I. チャイコフスキー）

第２３回定期演奏会

日時　２０２０年６月７日（日）１３時３０分開演
場所　すみだトリフォニーホール（大ホール）
指揮　米津 俊広
曲目　鋭意検討中

団員募集

Join us!!

アウローラ管弦楽団では団員を募集しています

当団では新しいメンバーを募集しています。当団の活動に興味を持たれた方は、ぜひご連絡ください。団員一同お待ちしています。

◇練習日時　：演奏会２～３ヶ月前から日曜日の午前
（次回定期演奏会は１０月下旬から練習開始予定）
◇練習場所　：都内施設（おもに江東区・葛飾区）
◇参加費　　：演奏会毎に２万円台（入団費、団費、チケット負担はありません）
◇募集楽器　：弦楽器全般（いずれも若干名）
※詳しくはお問い合わせください

◇連絡先　　：【メール】avrora@td-serv.net
【ホームページ】http://www.avrora.me/

アウローラ管弦楽団 第２２回定期演奏会 合唱参加者募集！

2020年1月11日(土)13時半開演　於 すみだトリフォニーホール

セルゲイ・プロコフィエフ／混声四部合唱と管弦楽の為のカンタータ
「アレクサンドル・ネフスキー」

С. Прокофьев, Кантата “Александр Невский”

指　　揮　：　田部井 剛
合唱指導　：　高橋 淳、中村 隆太、他
合　　唱　：　混声合唱団コール・ミレニアム

第２２回定期演奏会では、混声合唱団コール・ミレニアム様と共にプロコフィエフのカンタータ「アレクサンドル・ネフスキー」を演奏することになりました。この機会に、私たちと一緒に合唱で共演頂ける方を募集致します。ロシア文字が読めなくても大丈夫です（楽譜にカナが振ってあります）。
練習は８月５日から開始予定で、毎週月曜日の１８時半から１９時４５分、秋葉原（ちよだパークサイドプラザ６階多目的ホール）にて行います。
参加希望者は下記ホームページ、またはメールでお問い合わせください。

HP　　：　http://millennium.lix.jp/
メール　：　chor-millennium@jcom.home.ne.jp
繋がらない場合は 080-6535-5445（大橋）まで

Оркестр «Аврора»